

[書 評]

未完成の庭園

T. トドロフ著

鈴木正昭

本書は1998年に発表されたトドロフ氏の最近作であり、「フランスにおけるユマニズム思想」という副題を持っている。

「知られざる契約」と題されたプロローグには人が結んだ三つの興味深い契約が紹介されている。一つはキリストと悪魔の間のそれである。40日の断食を終えたイエスに悪魔は己を主と見なすことと引き換えにこの世をイエスに与えようと提案する。イエスは自分の仕えるのは神だけであり、その王国は地上にはないからと言って却下する有名なエピソードである。もっとも彼の後継者たちは悪魔の誘いに乗ってしまうことになるのだが。

二番目は15世紀に悪魔の代理人たるメフィストフェレスからファウストになされた提案である。この世のすべてを理解せんとする野心家にたいし、メフィストフェレスは24年後に心と肉体を自分に与えることを約束するならば、願いを叶えてやろうと誘惑する。その条件を承諾したファウストは全知を誇り、人々の尊敬をほしいままにするが、約束の期日が迫るにつれ無口になり、外出も稀になり、秘密を解明することにも興味をしめさなくなったという。ファウストは恐怖の叫び声を挙げながら、約束通りやってきた悪魔に引き立てられていった。

三つ目の契約はファウストのそれとほぼ同じ時期に結ばれたのであるが、その契約は相手にもその存在が知られないまま有効になってしまった契約であり、契約の存在を知らないまま当事者になってしまったのが近代人である。悪魔はイエスには権力を、ファウストには知を提案し、近代人には意志——自分で自分の意志を思い通りに操り、思い通りの生活を送る可能性——を提供した。だが契約の存在自体が秘められていたので、当然その代償も人々に知らされなかった。

こうして自由を獲得した近代人は徐々にその自由を拡大していった。しかしその自由も当初は書物の中に限定されており、その影響力は微々たるものだった。18世紀の後半に至り、それを飽き足りなく思う人々の力により、この考えは多くの人々に共有されるに至り、アメリカの独立革命とフランス革命を生み出した。

悪魔が人々に自由の代償を要求し始めたのはこの時期である。だが彼は巧妙にも自らの姿を人目に晒すことなく、幾人かの予言者たちの口を通して悪魔に支払うべき借財の存在を示唆させた。捨てなければならないものは三つあった。神、隣人、自らである。

契約の存在を知った近代人の反応は様々だった。彼らはいくつかのグループに分かれ、そのグループは離合集散を繰り返しながら今日まで生き延びている。

第一のグループは悪魔の言い分を全面的に承認し、自由の放棄を主張する一派である。この一派といえども全面的な過去への回帰が不可能であることはわきまえていた。彼らとは、過去を哀惜し、過去の長所をあたう限り保持しようと努める保守派のことである。

保守派以外の党派を著者は三つに分類している。これらのグループはいずれも近代の到来を承認するという点で保守派とは一線を画している。その三つとはユマニズム、個人主義、科学主義である。

科学主義者達は自由は知の領域にしか存在せず、それによって知られた知見によれば人間は生物的、歴史的に制約された存在であり、自由を保有していない。自由が存在しない以上、その代償を支払う必要はないという立場である。

個人主義者は保守主義者が神や社会の喪失であると考えた項目を、喪失ではなくそれらからの解放であると考えた。人間は力への意志を肯定し、自身の利益を図ればよいと考えたわけである。

ところで著者自身は以上に見た三つの立場ではなく、ユマニズムの立場に立つことを鮮明にしている。なるほど自由は大切だ、だが理想もなく、共通の価値観もなく、愛を持たない孤独者の満ち溢れる社会に生きることは私たちを不安に陥れている。

本書はフランスの思想史の中からユマニズムの系譜を辿ることにより、自由という問題をめぐる思想家達の言説の変遷を検討したものであるが、その根底にあるものは昏迷する現代社会の混乱の、そもそもの起源を明らかにす

ることであろうと思われる。著者の現代社会に対する危機意識が本書執筆の原動力である、と言っているのではないかと思われる。

それではユマニズムとはいかなる思想であるか、という点に関し、著者はそれはおおざっぱに言う人間が人間の活動の出発点であり、到達点でもある、人間中心主義の思想である、と述べている。その他の思想の中心を占めるのは著者によれば神であったり、自然であったり、伝統だったりする。

フランスにおけるユマニズムの歴史はモンテーニュをもって嚆矢とする。人間中心とはいえ、モンテーニュは無条件に人間を礼賛することはなかった。人間の生活は未完成の庭園であることを免れないことを彼は誰よりも承知していたのであり、本書のタイトルそのものがモンテーニュの「随想録」から採られている。

本書が対象とする思想家はフランスの16世紀のルネッサンス期から19世紀の初頭までに限定される。その理由を著者はユマニズムは最近の百数十年間さほど変容を被らなかつたこと、さらには古い時期のユマニスト達の著作のほうが、思想の原形を捉えやすいからであるとしている。

ユマニズムが異彩を放った時期はルネッサンス期、啓蒙思想の時代、フランス革命後であるというのが著者の推定であり、モンテーニュ、ルソー、パンジャマン・コンスタンがそれぞれの時期を代表する思想家である。モンテーニュがユマニズムの首尾一貫した原型を創り、ルソーにおいて花開き、コンスタンが革命後に生まれた新しい世界について考察を加えた、というのが著者によるそれぞれの思想家の位置づけである。また本書の書名を「ユマニストの思想」とし、「ユマニストの哲学」としなかつた理由について、ユマニズムは政治思想、道徳思想、人類学的・心理学的仮説などの寄せ集めであり、哲学に関係はあるけれどもその範疇に収まりきらないからだと説明している。

本書執筆の目的はユマニズムの思想家達の思想を再構成することではなく、その著作を注意深く読むことにより、ユマニズム思想の一つのモデルを打ち立てることであると著者は言明している。単なる概説書ではなく、本書

自体を思想の書物たらしめたい、ということであろうと思われる。

プロローグの終わりで、本書は1979年から開始され、89年に『我々と他者達』と題される著書にまとめられた研究とペアをなす研究であることが述べられている。筆者は未見であるが、同書ではユマニズムの普遍性というテーマが論じられているそうである。

著者はヨーロッパ人の精神に起こった革命は数世紀という長い時間をかけ、ゆっくりと醸成されたと考えている。これは社会の成員にとって世界の構造と法則があらかじめ与えられた不動のものであった時代から、世界の性質を発見し、規範を定義できる時代への変換だった。言い換えれば、規範が自らの外部にあった時代から、それが自らの内部に求められる時代への変化である。これは重力の中心が宇宙から人間に移ったと言ってもいいし、客観的な世界から主観的な意志へ移ったのだと言い換えることも可能である。あるいは外部にある命令に従う時代から、その命令を自らつくる時代への変換である。

以上はあまりにも大づかみの議論であるけれども、それを通して我々の暮らす社会についての思想の枠組みを構成するいくつかの傾向が明らかにされた。著者はこうした近代思想のいくつかの傾向を「近代主義」、「個人主義」、「自由主義」、「理性」、「主観性」、「西欧」というキーワードで特徴づけることをせず、それぞれの思想のグループに「ファミリー（一派・グループ）」という名前を与えている。そうした理由についてはそれぞれのファミリーに属する思想家もそれぞれ固有の特徴があることと、それにもかかわらずそれら同一のファミリーに属する思想家達の同盟関係は可能だからであるとされている。そしてこのファミリーが全部で四つあることは冒頭で紹介した通りである。

コンドルセ、サド、コンスタン、ボナールというそれぞれのファミリーを代表する人物はすべて18世紀半ばに誕生している。彼らの思想は大革命後のフランスに登場する思想を体現している。著者は偉大な思想家をこのよう

に分類することの不自然さを十分に承知している。分類にうまく対応するのは偉大な思想家の「弟子やエピゴーネンだけ」だからである。

大革命後ボナールは悲惨な現実をもたらした大革命に異を唱えた。そして大革命の思想的な根拠は哲学、とりわけデカルトとルソーのそれであると考えた。彼によればこうした哲学はすべての人々の宗教を個人の理性に、至高の存在と隣人への愛を個人の利害に置きかえるものであり、それが革命をもたらした、と考えたのであった。ボナールによれば善悪の決定権を個人の意識に委ねてしまった点においてルターもカルヴァンも大きな過ちを犯した。彼らの思想を一般人にまで流布させたのが大革命である。この思想は自らの上に神があることを認めず、自らのむこうに隣人がいることを認めないという点で、個人に閉じ込められている。「18世紀の哲学は個人と宇宙だけを見て、決して社会を見なかった。」

当然のことながら、こうして成立した近代人は「唯物論者」たることを免れない。従って道德の根源たる神が不在となるので、道德も成立しなくなるわけである。神が不在であればすべては許される、というドストエフスキーの大審問官を先取りする思考が既に抱かれていたのは驚くべきことである。

他のファミリーユすべてが個人に主眼を置くのにたいし、保守派の思想はあくまでも社会を優先する。なぜなら個人は自らの所属するグループや制度や慣習を介して始めてそのアイデンティティーを保証されるからである。人は共同体によって形成されるがゆえに、共同体に服従しなければならない。

ところで共同体への全面的な服従は、宗教への服従と衝突する可能性がある。それを避けるため、近代の保守主義は政治と道德とを明確に分離してしまった。同一の神に帰依する国同士が政治的な利害関係において対立する可能性がありうるからである。保守主義とはいえやはり近代の産物であることは明らかであり、神権政治の時代は遠い過去のものになったことがわかる。

いずれにせよ、保守主義者にとって個人は共通の価値や自らの所属する集団に従うべきものである。これは保守主義が性悪説に立脚するからである。

この点でボナールはアウグスチヌスとも、ジャンセニストとも、さらには鋭く対立したルターやカルヴァンとも共通する認識に立脚している。そうである以上、人間の行動を律するのは人間より偉大なもの、すなわち神の力を借りる以外にないわけである。従って人間には選択する自由などないことになる。自らが望まなかった出来事が一身に降りかかった場合、それは神の意志に他ならない。人が自らの運命を自ら決することは神にたいする反抗であり、悪魔の所業である。そのような人間に自らを導く規則をつくり出すことのできようはずはない。

1830年の7月革命後、保守派は別の立役者を持つことになった。それはアレクシス・ド・トクヴィルである。彼はボナールとは異なり過去への回帰はありえないことだと考えていた。時代が近代と呼ぶ新しい時期に突入し、貴族の時代が民主主義の時代になったのだという彼の信念は動揺することはなかった。彼の考えによれば、この新しい時代の人々は三つの大きな情熱に動かされている。まず第一は自由であり、自らの運命を自ら決する権利である。第二は平等である。第三は幸福である。最後の幸福にたいしてはトクヴィル自身はたいして重きを置いていなかったようである。彼がもっとも重きを置いたのは自由であり、その先行きに大きな関心を払っていた。ボナールにとってそうであったように、トクヴィルにとっても大革命を出発点とする近代社会は自由を台無しにしてしまう恐れを内包していたからである。手に入れたものの代価は支払われねばならなかった。

トクヴィルは「個人主義」という言葉を使用したもっとも初期の著作家の一人である。彼にとってこの言葉は家族や友人達に取り巻かれた私生活にたいする偏愛、および自分がその中に暮らしている社会にたいする無関心を意味していた。こうした傾向は階層制の崩壊によりすべての人が同等の身分になったことから生じたアイデンティティーの喪失に由来する、とトクヴィルは考えた。

脱社会化の傾向が更に強まり、個人が社会を身近の人間だけに限定し、更には個人だけに閉じこもるようになるかもしれない。「民主主義は個人を絶

えず自分一人の世界に連れ去り、ついには自分の心の中だけに閉じ込めてしまう恐れがある。」

トクヴィルの考えによれば、もう一つ民主主義の社会を危うくするのは人々が絶えず自らの物質的な利害を満足させることを考えるようになることだった。彼にこうした考えを持たせたのはアメリカ社会を観察した結果ではないかと著者は推測している。アメリカでは貴族社会で名誉が占めていた地位を金銭が占めている。

トクヴィルが恐れたのは、上記の傾向がせっかく勝ち取った自由の実質を奪い去る危険を秘めていたことである。人々は国家にたいし物質的な欲望を満足させるよう過度に要求することにより、自らの責任を行使すべきところに国家権力の介入を招き、結果的に自由を狭めてしまうことになるからである。

トクヴィルが民主主義の将来に危惧の念を抱いたのは政治的な見地からだけではなかった。それは民主主義の社会が趣味や感情の自由を、個人の画一化や体制順応を通じてもたらすことである。これは書かれた時期を考慮すれば驚くべき先見性に満ちた見解である。もっともこれは既にルソーによっても予見され、非難されていた。近代人の嗜好はたびたび変わるけれども、その結果またすべての人が同じ嗜好を持つことになる。こうして社会の中で人々はますます似た存在に化してゆく。コミュニケーション技術の発展はそれを外国にまで押し広げる。すべての欲望が同一になった時、それを自由と呼ぶことが出来るであろうか。

保守主義の到達した近代にたいする態度は、主体の自由がもたらす代償が大きすぎるから妥協点の発見を諦めて、代償を支払わないで済まそう、というものであった。それにたいし他の三つのグループは近代の原理の承認という点においては同じであったが、そこから引き出した結論はそれぞれ異なっていた。

科学主義者達は世界についての決定論的見解を共有していた。フランスで

はこの流派はデイドロやコンドルセといった啓蒙主義者達に代表されていた。19世紀になると後継者であるコント、ルナン、テーヌらが輩出した。もちろんこうした思考の原形は古代ギリシャにも、キリスト教の中にさえも既に存在していた。パウロは人間を陶工の手中の粘土に喩えたけれども、この場合には自由はもちろん存在する余地がないことは明白である。アウグスチヌスも人間の自由を大きく認めたペラギウスを異端であると激しく攻撃した。この点では一般には近代の幕を開いたとされるルターやカルヴァンも同様であった。パスカルとイエズス会の争いも人間の自発性を主張する後者と、それに反対する前者の間に繰り広げられた論争だった。科学主義者達がこの衣鉢を継ぐ人々であることは言うまでもない。自然や歴史が既にすべてを決めていて、人間が介在する余地は残されていない。相違点は神の意志が存在した場所に遺伝だの歴史だのが取って代わった点だけである。

19世紀には三つの大きな決定論が入れ替わり登場した。人間は歴史や社会、あるいは経済の構造に支配されているという考え、次に人間の運命は血液によって、すなわち遺伝によって支配されているという考え、世紀末に登場した人間の行為は意識と意志によって支配されているのではなく、無意識の領域に支配されているのだという考えである。これら三つの決定論は主導権を握ろうと、それぞれ論争し、また場合によっては協調することもあった。こうした思考法の中でゾラが採用した遺伝理論をそのまま信じる人は今日では皆無であろう。しかし、それでは我々が決定論から解放されたかといえ、遺伝子生物学が隆盛を極めてい今日必ずしもそうは言いきれない状況が存在することは認めざるを得ないであろう。

決定論から出てくるのは改造への意志である。構造を理解したのであるから対象が社会であれ、生物であれ改造できないはずがないではないか。20世紀はとりわけ社会を改革しようという幻想に人々が翻弄された時代だった。しかし社会主義がほぼついでた今日になっても、改革の叫び声は小さくなることなく、とりわけ20世紀末の我が国ではますます大きくなっているように思われる。バブルの崩壊後はことにそうである。そればかりではない。

生物の改造は品種改良という形式で以前から広く見られたのであるが、今日ではより過激な生命創造さえも行われている。

20世紀はまた全体主義という科学主義から派生した国家群の出現を目撃した世紀でもあった。すべての物は与えられている、したがってすべてを望むことは可能である、すべてを知ることが出来る、この三つの認識の複合が全体主義を極めて危険なものにした、というのが著者の見解である。これが可能であればユートピアを創造することも可能はずだった。しかしその結果が恐るべきものになったことは改めて付け加える必要はないであろう。敵対する階級は消滅すべきものなのであるから、良心の呵責なく消滅させることが出来る。劣等民族は害をなし、滅びるべき宿命を負っているのだからこうした民族の絶滅は人類にとってよいことだ。こうした思考法がある社会の中でどれだけの猛威を振るうのか、平和な社会で暮らしている場合なかなか想像は困難であるが、オーム真理教など見ていると、相当数の構成員が強力にマインドコントロールされる事態は決して絵空事ではないことがわかる。

社会全体をコントロールしている指導者達が保守派の理想に一脈通じる理想に動かされる可能性があることを著者は指摘している。双方に共通するのは指導者による著しい価値の押し付けである。集団の個人にたいする優位、服従の自由にたいする優位なども双方に共通して見られる特徴である。これらは通常は正反対のものと考えられている。保守派は安定を追求するのに対し、革命派は変化を追求するからである。前者は過去に理想を求め、後者は未来に理想を求め、というのが大方の理解であろう。しかし保守派のポナールと空想的社会主義者サン・シモンが民主主義を主張したバンジャマン・コンスタンに投げつけた非難は著しく酷似していた。右翼から左翼へ、また左翼から右翼へという転向を私たちはしばしば目撃してきた。

科学主義の出発点は、宇宙は法則的なものでそのすべてを知ることが可能であるという信念だった。個人主義の前提するものも同工異曲であり、人間は自己完結した実体であるという考えに立脚している。周知のごとく西洋で

は個人主義にはストア派以来の長い伝統がある。17世紀フランスはこの派の思想はラ・ロシュフコーにその後継者を見出した。彼によれば人間は本質的に孤独でエゴイストであり、彼の行為はすべて自己愛と個人的な利害により動機づけられている。だが人間は処罰を恐れ、他人に素顔を見せることはない。人は私心をもたず、寛大であるかのごとくに装う、という人間観である。モラリストの任務はその美德の仮面をはぎ、人の本性を露にすることである。

18世紀になると百科全書派の科学主義者達もこうした考えを共有するようになり、それとともにラ・ロシュフコーやパスカルの否定的な側面は影を潜めていった。そして人間をあるがままに受け入れ、自然に反抗するという無駄な抵抗は止めるがいい、という考えが優勢を占めるようになった。その極北がサドであることは多言を要しないであろう。社会などというものは外部から人間に押し付けられたものであり、人間にとって不用のものである。したがって美德などは欺瞞であり、各自が自己にとって快適なように振る舞えばいいのである。「汝の力ないしは意志の限界以外、汝の快樂に限界を設けるべからず。」サドが肉体にこだわったのは、それが個人に所属するものだからである。この派には他にもいくつかの派生型が存在するけれども、いずれにせよ、くびきから個人を解放すべきという思想は、そうする過程で社会的な紐帯や共通の価値観を破壊してもいい、という思想である。

上記の思想家達のグループは悪魔との間に結ばれた契約の存在を前提にし、それにたいする反応という形でそれぞれの主張を展開した。ところがユマニスト達はそのような契約自体がそもそも存在しなかったのである、という立場を取った。

ユマニストという言葉はヨーロッパの思想史においては少なくとも三つの意味を持っている。最古のものはルネッサンス期に登場した、いわゆる人文主義者達、すなわち古代ギリシャやローマの歴史や文芸の研究者である。最も新しい定義はいわゆる人道主義者という意味である。しかし著者が本書で

用いているのはこれら二つとは異なった意味においてである。著者は自らの行為の決定権は人間に帰属する、というのがユマニズムの基本的な姿勢であるとされている。人も自然や神のように、自らの運命を決定するのである。

ユマニズムを簡単に定義するため、著者は「我」の自律性、「汝」の合目的性、「彼ら」の普遍性という公式を用いている。そしてこの三つで一組のセットが成立するのは人類が獲得した人間中心主義によるのであり、それは天動説から地動説への宇宙観の変換と期を一にするのだ、というのが著者の見解である。「我」が行為の源泉、「汝」が行為の目的、「彼ら」が人類の一員であること、この三つは常に三点セットになるわけではない。著者はこの三位一体が成立する思考の枠組みをユマニズムと呼んでいる。

ユマニズムは人間とはいかなるものかを定義しているから人間学であり、人間がそれぞれ慈しむべきものである事を告げ、すべての人に同じく尊厳を認めるゆえに道徳であり、主体が自律性を行使し、同じ権利を享受できるゆえに政治学でもある、と著者は主張している。

フランス革命の標語はよく知られているように、自由、平等、博愛である。著者はこの標語にユマニズムとの類縁性を見ている。自由は主体の自律性であり、平等は人類の単一性であり、博愛は他者を兄弟同様に見なすことだからである。ただし近代国家が採用したこの標語の主体が個人から集団へと転移されているところが最大の相違点である。

従ってユマニズムの主張に最も近い政治体制が自由な民主主義であることは著者も承認している。だからといって著者は両者が同じものであると言っているわけではない。両者はどちらかが他方に包摂されたり、相互に排除しあう関係ではない。その証拠にユマニズム以外の三者もまた民主主義体制の中でそれぞれそれなりに隆盛を誇っている。民主主義は宗教的寛容の精神を母胎にしているので、本来ある程度までの価値の多様性を許容する。

著者はそうした点を踏まえながらも、他の三者とユマニズムでは民主主義にたいする姿勢が異なっている、と主張する。前者は民主主義に対して遠心的であるのにたいし、後者は求心的である。個人主義は無政府主義的、絶対

自由主義的な志向をもち、法律や国家が体现する共通の規約が出来る限り弱く、限られたものである事を望む。また保守主義者は個人の意志の強さや正当性を信じていないので、権威主義的な体制に好意を寄せる。さらに科学主義に立脚する国家は全体主義に向かう危険が大きい。生物的、歴史的に全体を制御できれば、もはや個人の意志を考慮に入れる必要はないからである。保守主義と科学主義との理論的な根拠は、前者が神学を、後者が科学を、前者が伝統を、後者がユートピアを主張するなど、相反するものであるが、イデオロギー支配による統治という点において共通する。著者によればユマニスムのみがこうした点から自由である。

ところで著者は自意識の存在こそ、動物と人間とを分かつ最大のメルクマールと考えている。人間の子供は極めて早い時期からそれを獲得する。「汝」が「我」を見つめる、それゆえ「我」は存在する。自己にも他者にも存在するこの自意識が一方で間主観的な関係の増殖する複雑さを生み出すわけであり、その指標が言語である。自意識は他方では自らと齟齬をきたすこともある。意識は自らを抜け出して自らに逆らう事もある。しかしここにこそ人間の自由の根拠が存在する。人間とはこのように自らを離脱できる能力によって特徴づけられる。

個人主義者とは異なり、ユマニスト達は社会性を人間の基本的な属性であると考えた。彼らは個人という原子のごときものがまずあって、その後からそれを寄せ集めると社会ができるとは考えなかった。言い換えれば「我」と「汝」が同時に成立するのが社会なのである。還元不能の個人は当然ながら間主観性を前提している。

科学主義者との相違点はユマニスト達が価値の自律性ばかりでなく、自由の可能性をも主張した点である。人間は逃れられない力に翻弄されてばかりいるわけではない。個人主義者達は人間の自律性を信じているけれども、個人が社会に所属しているという点を軽視する。科学主義者達は人間の自律性は受け入れるけれども、それを個人にではなく、グループに付与する。彼らにとって個人は大した意味を持ってはいない。ユマニストは個人が自らの意

志に従い、また自らの受け入れた法律に従って行動できるのだ、と考えている。しかもその法則は人間の共同体の外部から与えられるものではない。またユマニストは個人の自由を認める点において、また信奉する価値が人間に由来すると考えるという点で保守主義者達とも異なっている。

こうした諸点を勧告し、著者はユマニストの答えこそ悪魔の挑戦にたいするもっとも満足すべき反応である、としている。

ユマニズムにたいする批評も当然ながら思想間の相違から生まれてくる。保守主義や科学主義からの批判は、ユマニストが人間の行為を決定づける生物的、社会的、文化的な原因を無視しているという点に集中する。ユマニストの側からの反論においては、まず人類の可塑性、あらゆる状況への適応能力が着目される。ユマニストにとって人間は本質であるよりはむしろ可能性なのである。彼はどのようなものにもなれるし、どのようにも行動できる。人間には必然性は存在しない。

ところで人は話す能力を付与されている。両親から生まれた子供はある特定の言語を話す社会で暮らす。成人した子供は母国語を話すことも、後から身につけた言葉話すことも可能である。ここに必然と自由との最もわかりやすい実例があると著者は主張する。しかし当然ながらユマニスト達は人間が完全に自由な存在であると主張することもない。また人間はすべてを選ぶ事ができるとも、自分が己の唯一の主人であると考えない。彼らが主張するのは、自由、選択、意志の行使は開かれていて、あらかじめ固定されたものではないことである。ユマニストといえども、人が常に理性と意識にのみ支配された存在であるなどと考えてはおらず、本能とか無意識と呼ばれるものの力を知らないわけでもない。さらには生物的な所与、経済的な必要性、文化的な伝統が個人に及ぼす制約は十分に承知している。したがってユマニストの主張は人はそのような束縛に抵抗し、自らの意志に従って行動することも出来る、ということを確認しているのに過ぎないとも言える。だからユマニストは例えばサルトルのように、人が己の唯一の決定権者であるなどと考えたりはしない。それは人が多様性に富んではいるけれども、同時に

過去によっても規定される存在でもあることをよく承知しているからである。さらに人間は自らの肉体や、居住する国などにも制約される存在だからである。「神は人を完全に独立したものにも、まったくの奴隷にもなさらなかった。確かに神はおのおのの人の周囲にそこから出ることの出来ないような宿命的な円弧を描かれた。しかしながら、この広大な制約の中では人は力強く、自由である。そして諸国民も同様である。」というトクヴィルの言葉を著者は引用している。自然すら常に必然的なものではなく、偶然に支配されることもあることは現代の科学では常識である。まして歴史ではより頻繁に偶然に支配されるのは当然のことである。しかしそれらは人間の自律性や意志的な行為をいささかも排除しない。

ユマニズムは一元論ではない。それはこの思想が人間や社会をそれぞれが互いを制約する複数の原理の相互作用の結果であると考えているからである。所与は意志の分野を制限するが、一方意志は必然の支配に裂け目をつけるのである。価値の面でもこうした複数制は保たれるものの、価値相対説になることはない。寛容の精神が同一の神に至る複数の道の存在を許容したように、ユマニストは、たとえ価値観は様々であっても、対話を通じて共存をはかることは可能であると考えている。その根拠は、神々は多数であっても人間は一つであるという確信を彼らが共有するからである。

知識に関してもユマニストと他の流派の思想には捉えかたにおいて大きな相違が認められる。保守主義者は世界を知覚しようとする人間の努力はあらかじめ半ば失敗に終わることを宿命付けられていると考える。また科学主義者達は自分達が世界を支配する法則についての真理を把握していると考えている。それにたいし、ユマニストは事実として人間の知識は限られているとは考えても、それを宿命的であるとは考えない。彼は人間の理性の能力が理論的には無制限であることは承認するものの、物質や精神があまりにも複雑であるため、人間は未だその微少な部分しか知らないと考えている。「驕りは理性にふさわしくない」とモンテーニュが語っている通りである。だから科学以外の理解、表現の形式にも相当部分の場所を残しておかなければなら

ない。ユマニズムは合理主義と非合理主義との相克を超えたものであり、人知は合理的分析を逃れた道を経由する場合もあることを承認する。

ユマニズムの宗教との微妙な関わりも知識との関わり方と似ている。一方ではそれは宗教からは離脱しようとする。個人は神を信じるか信じないかを選択できること、さらには社会は神権によってではなく、人民の意志によって統治されるべきだ、というのが当然の前提とされているからである。しかし他方、モンテーニュからコンスタンに至る偉大なユマニスト達は自らを宗教的、キリスト教的存在であると宣言していることもまた確かである。著者はユマニスト達のキリスト教を生き易い環境を整えるための方便である、という見方を退けている。彼らは人間界の出来事に神学的な理由付けや正当化を持ち込むことを忌避したけれども、経験の宗教的次元の排除は求めなかったからである。ユマニズムの中に宗教にたいして、とにかく場所が用意されているのは、宗教が宇宙の中での自らの位置だの人生の意味だのに関する疑問に答えてくれる可能性があるからだ、と著者は考えているようである。

ところで著者は繰り返してユマニズムは人間万能の思想ではないことに読者の注意を促している。一般にはユマニズムの先駆者とされるペラギウスやその後継者達とユマニストとを区別すべきであると彼は考えている。ペラギウスにとっては人間は完全に自由で、従って自らの運命に責任を持つべき存在である。人間は自らの主人である以上完璧でなければならないとペラギウスは考えた。人間性は善であり、したがって原罪も存在しない。自らが不完全なのは自らの責任であり、過ちに言い訳は許されない。このペラギウス流の考えはキリストをはじめ聖人達の生き方をお手本に掲げ、それを遵守するよう強制し、従わない場合には処罰するということになりがちであるという理由で、著者はこの思想を退けている。

デカルトの「自然の主人にして所有者になる」という言葉をユマニズムの起源におく論者も存在するようであるが、著者はそうした見解にたいしても否定的である。著者によればユマニズムは人間が自然の奴隷ではないことを断言するけれども、同時に自然が人間の奴隷になることも求めてはいない。

デカルトの考えを著者はむしろフランシス・ベーコンらの科学主義に分類している。デカルトこそ人間による自然破壊の元凶としての科学技術の起源に位置する人物であると見なされる現代の状況を考慮すれば、こうした見解は妥当であると思われる。ユマニズムは人間の万能を主張するのではなく、神と自然の万能を否定するものである。ユマニズムでは所与の傍らには意志のための席も用意されている。

著者の主張は唯一の神とか理想といったものへの熱狂がユートピア幻想を生み出し、さらにはそれが現実化を目指して運動を開始すると、元来目指していたものとは正反対の地獄を出現させてしまう、という20世紀の背理にたいする深刻な反省に由来するものであろうと思われる。さらには宗教戦争の歴史も著者の脳裏に去来したかもしれない。ユートピア志向はとかく自らの絶対化をもたらし、反対する勢力の殲滅という運動を誘発しがちであることを考えれば、宗教戦争や共産主義国家の建設と破綻を目撃したヨーロッパの知識人の中にユマニズムを一つの思想運動として提唱する人が出現する理由は十分に理解できる。ユートピア思想の轍を踏まないため、著者は「悪が排除されるような都市の建設はユマニストの計画ではない」と断言しているほどである。

人間性は善か悪かという問題も古来洋の東西をとわず人々を悩ませてきた問題である。悪であるとするのがキリスト教社会ではアウグスチヌス以来の伝統的な考えである。善であると考えるのは「善良な野蛮人」系統の考えである。ユマニズムは経験から人間を善良な存在と把握することを拒絶する。しかしそれはまた人間性を悪であるとする考えにも同調はしない。ジャンセニズムやプロテスタンティズムでは人間はもう一つの悪魔であると考えている。人間は不完全な存在である、というモンテーニュの言葉はまた本書の著者の言葉でもある。人間は善でも悪でもないが、善にも悪にも善悪双方にもなることのできる存在である。ユマニズムは人間の力や善良さを過大評価はしない。

人間が善でも悪でもなく、どちらにもなりうる可塑性を持つという理解か

らは教育の重視という実践が導き出されることは容易に納得されよう。もし教育が過ちを犯せば、肯定的な側面が損なわれ、否定的側面がはびこるに任せることにもなりかねない。モンテーニュ、モンテスキュー、ルソーら偉大なユマニスト達がそれぞれ教育に大きな関心を示したのはそのためであると筆者は考えている。保守主義者達が伝統を純粹に保存し、忠実に次の世代に伝達しようとし、科学主義者達が機械的に望む通りの結果を生み出すように厳しい訓練を施すことを求め、個人主義者達が個人の開花と最大限の満足に役立つものを見つけ出すことで満足するのにたいし、ユマニストはより大きな自律性を獲得させ、人間の行為に人間的な目的を付与させ、人類のすべてのメンバーに同じ尊厳を認めることの出来るような共通原理があって欲しいと考えている。

今まで見てきたユマニズムと他のグループの思想に見られる相違の究極的な理由は、著者によれば価値についての考え方の相違による。価値についての考え方には古来大きな二つの流れがあった。すなわち価値は与えられたものとして存在するという考えと、人間がそのように望んだものが価値として承認を得たのであるという考え方である。古代人は多くの場合価値は自然や神により与えられたと考えるケースが多かったのにたいし、近代人、とりわけ個人主義者達は 大抵の場合人間が望んだものであると考えた。ホブズが「リヴァイアサン」において「法律をつくるのは真理ではなく、権威なのだ」と述べた時彼が後者を代表していたことは言うまでもない。価値が自然の裏付けを持たないということは、それが「人工的な」ものであるということであり、人間の意志にのみ由来するということである。従ってある価値観が他の価値観を圧倒するということは、その価値観を支持する人々がより強大な意志を持つことになることを意味する。

当然のことながら価値に関する近代的な考え方はすんなりと一般の承認を得たわけではなかった。それは一般的には古代ギリシャないしはキリスト教への回帰の欲求という形を取った。そして一部には折衷的な運動もあった。

ユマニストの価値に関する立場は、それは自然に由来するものではなく、

さりとして恣意的なものでもない、というものである。彼らは古代人のように事物と価値とは分かちがたく結びついていると考えることは拒絶する。しかし同様に価値が恣意的なものであるという考えにも承服できない。彼らは自然主義と相対主義の二者択一に閉じ込められることには異議の申し立てをおこなう。

「我」の自律性、「汝」の目的化、「彼ら」の普遍性というユマニズムの三つの価値観も常に社会の承認を得てきたわけではない。ある時代には服従の美德がもてはやされたし、唯一の神を崇拜することが求められた時代もあった。また「我」がいついかなる場合でも「彼ら」より優先されるべきと考えられた時代もあった。（著者はこれを過去のこととして語っているが、筆者はこの点に関してはやや懐疑的である。）

ルソーは生物的な制約に対立することが可能である、という点に人類と動物との主要な相違点を見ている。「鳩はおいしい肉をたくさん入れた大皿の傍らで死ぬであろうし、猫はたくさんの果物や穀類の上で死ぬだろう。そうしようとするを思い付きさえすれば、軽蔑している食物から十分な栄養を摂ることが出来たのに。」人間は慣習（文化）を変えることができ、自らの本能に逆らうこともできる。つまりは自由にたいする嗜好は人が自由に選ぶことのできない本能なのである。

ユマニズムが自らの価値観を防御するのはそれが自然の秩序に組み込まれているからではないし、最も強大な意志がそのように決めたからでもない。奴隷化とか、個人の操作や物体化とか、人類の一部を絶滅させることに反対するのは、そうすることが自らの誠意であるからばかりではなく、個人の自由、他人に対する尊敬の念、すべての人の平等な尊厳といった価値観のためでもあり、こうした価値観こそが人類に最もふさわしいものだと考えるからである。

著者はフランスのユマニズムの様々な要素はモンテーニュにより総合されたと考えている。「我」の自律性は「選択と自発的な自由」に基づく行為への彼の好みに伴うものである。また「汝」の目的化は、友情の実践が「水や

火という要素」よりも人間にとって必要であり、快いからである。「彼ら」の普遍性はモンテーニュの「私はすべての人を同国人と見なし、ポーランド人をフランス人同様抱擁する」という原則への共感によるものである。

当然のことながら、ユマニズムは孤立した思考ではなく、多くの過去の遺産を継承している。古代ギリシャの都市国家は自律の追求の結果である。そこでの民主主義は現代人の目で見れば、極めて不十分、不徹底なものであったとはいえ、伝統的な法よりも自発的な決定をより重視したことの現われである。また彼らが人間にたいする普遍的な愛、すなわち「人類愛」を知り、尊重していたことは広く知られている通りである。

ユマニズムはまたキリスト教からも多くの遺産を継承した。キリストの言葉はすべての人を対象としている。こうした普遍性は双方に共通の要素である。さらにその中でもとりわけペラギウスおよびその継承者には、その行き過ぎた点に関しては留保をつけながらも、多くを負っていることは否定できない。さらにオッカムの人間と神の領域を峻別し、自由の中に我々の行為の明確な特徴を見る思考から大きな影響を受けていることも確実である。「人間の尊厳とは彼が持つ、いついかなる時でも、好きなことを、好きなようにすることに由来する」というオッカムの言葉はユマニストの言葉としても十分に通用するに違いない。

著者はその後もユマニズムと他の思潮の歴史を概観しながら、「いつも同じ議論がなされており、変わるのはラベルだけであるか、あるいは俳優は変わっても演じている役はいつも同じ」といった印象を持つこともある、という印象を述べている。筆者もこの点には全く同感である。現在でもソクラテスやその先駆者達の著作や言葉が哲学科で学ばれ、多くの人に影響を及ぼしつづけているのも、根本的な問題は人類の初期に出尽くして、後世はその変奏曲を奏でつづけているだけである、という筆者の個人的な印象は本書を通読しても変わることはなかった。

本書は以上に見たような見解をルソーを始めとするユマニストの思想家達の系譜をやや詳細に分析しながら導き出したものである。著者の分析や考察

はなかなか興味深いものであるが、筆者は哲学や思想を専攻しているわけではなく、本書で検討される著作も多くは書名のみ知っていても、未読のものが多く、したがって著者の細かな分析の適否を論じることはその任ではないし、既に予定の枚数を大幅に越えている。

著者の執筆の動機になっているのは21世紀を迎えようとしている今日の世界の社会的、文化的状況に対する危機意識であろうと思われる。現代社会が人々に強いている孤独や自閉の症状は人々を個性的にするどころか、同じ鋳型からくり貫かれたかのごとき画一的人間を作り出してしまおう、と著者は主張する。そのような人物に満ち溢れた社会に自由が存在しうるのははずがない、と著者は考えている。

技術偏重の風潮もまた著者に不安を与える要因の一つである。技術の追求が自己目的化され、本来の目的が忘却されてしまうことが多いからである。さらに技術偏重の社会は同時に経済偏重の社会でもある。経済的な繁栄が現代社会の唯一の価値になり、唯一の目的になってしまったことに著者は深い憂慮の念を示している。つまり経済の本来の目的はここでも忘却されている。唯一の価値基準しかない社会が自由とは相容れないものであることは多言を要しないであろう。ただ全体主義国家の拘束に比べると緩やかであるので、拘束を拘束であると感じない人が多いだけのことである。

こうした技術偏重、科学偏重の果てに我々が辿り着いたのが、環境汚染であり、遺伝子操作である。ユマニズムは技術そのものには反対はしないけれども、それが手段であることを止めて目的になることには反対する。こうした危機的状況に対し著者は教育の力に大きな期待をかけている。もちろんそれは学校で行われる知育に限定されるものではない。

著者の主張は極めて良識に富み反論の余地はあまりないものの、それが社会の主流の考えとなるのはなかなか困難ではないか、というのが筆者の率直な印象である。ユマニスト達の価値観は理想として抱かれることはあっても、現実の前に絶えず敗退を余儀なくされたのが歴史の冷厳な事実だったのではないか。事情は20世紀もいよいよ最後の年を迎えようとしている現在も変

わっていないのではないだろうか。それどころか、世紀末の諸現象を見ると、著者の主張する価値観が人類共通の価値観になる時代は永遠にこないのではないかと悲観的にならざるを得ない。

もちろん著者はこうした当然の疑問に対しても「20世紀は人間性に深刻な疑問を抱かせる出来事を限りなく目撃してきた。しかし現代のユマニズムはアウシュヴィッツやコリマから出発するのだ」と主張し、希望を失いかけた人に対しては「シジフォスの運命こそ人間の条件なのだ」と語りかける。それは人間の不完全性を熟知しながら、地上の楽園などという戯言に心を奪われることなく、幾度でも試練を潜り抜けてみせようという思想である。

結局のところユマニズムは一つの賭けである、と著者は主張している。自らの意志に従って行動し、互いを平等に扱うことが出来るほうに賭けることを選択するわけである。それは人間の不完全さの中に、神が人間に与えた自由を確信したエラスムスの道を選ぶということの意味する。

本書は思想的な書物としては読み易く、一般の読書人でも十分に理解することが可能であると思われる。思想的な書物には難解なものが多く、専門家以外には近づきがたい今日の状況を考えると、大変にありがたいことである。